BETA戦線異常無し

工作員その１

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＢＥＴＡ戦線異常無し

【Ｎコード】

Ｎ５５０２Ｘ

【作者名】

工作員その１

【あらすじ】

ある日突然、マブラヴオルタの世界に飛ばされてしまった。そこで何故か、あ号標的により新型ＢＥＴＡ開発のアイディアマンとして就職させられた。僕の運命やいかに！？

アイディアの投稿について

理解していただきたい事

1・アイディアが全て採用されるわけではないので、ご了承ください。

2・投稿してくださったオリジナルＢＥＴＡの使用用途は戦闘とは限らないので、ご容赦ください。

3・名前を付けて投稿して下さっても、場合によっては名前を変更するかもません。

4・採用して欲しいと考える方だけにアイディアを出して欲しいので、ふざけたアイディアは出さないで下さい。場合によってはブロックユーザーに登録させていただきます。

採用の基準から外れるアイディアについて

・能力が強すぎるＢＥＴＡは採用の基準から外される可能性がありますのでご注意ください。（例：一匹で一個大隊を壊滅させることができ、さらに量産可能）

・ロボット型のＢＥＴＡは絶対に採用しません。（例：ミサイルを撃ったり、機関銃を装備させたり）ただし、身体の一部がミサイルっぽくなっていてそれを飛ばしたり、銃弾っぽくなっていてそれを飛ばしたりするのは例外です。要するに、『ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ』

のアラガミ（ボルグカムランとか）のようなもので無ければＯＫです。

・この小説の主人公は、人間に拷問を掛けたり、人体実験などはやらない主義なので、拷問用ＢＥＴＡなどもご遠慮下さい。（例：三角木馬型や、アイアンメイデン型など）

・当小説はオリジナルＢＥＴＡの案を出すことにあるので、『マブラヴ』以外に出てくるモンスターや怪物をＢＥＴＡで再現するなどは行いません。（ただし、イメージではこんな感じ、と表記するのであればセーフです）

アイディアの投稿について（後書き）

以上の条件を踏まえた上で、アイディアを提出してくださると嬉しいです。

是非、お願いします。m（＿＿）m

仕事くらい、自分で選びたいよね

ベチャ

なんだかムニムニと柔らかい床に落とされた。それに身体がベタベタの液体でぬれている。かなり不愉快だ。というか、ここは何処だ？

昨日はちゃんとベッドの上で寝たぞ。こんなベタベタのスライムの中で寝た覚えは無い。

若干重い瞼を開けて周りを見る。なんだかとても広い部屋……といえるのだろうかこの空間は？絶対に東京ドーム十個分はありそうだぞ。

と、後ろで何やらグチュグチュという嫌な音がしてきたので、振り返ってみるとそこには、

「……キモ」

何本もの触手を持つ、六つ目（目なのかな？）のタコがいた。キモい、キモすぎる。なんだこの生き物？地球にこんな生き物が存在するのか？いや、深海生物の分類かもしれない。暗闇と水圧に耐えるために進化した身体はかなりキモくなるらしいし。

「いや…待てよ？こいつ……」

僕は自らの灰色の脳細胞（笑）をフル回転させて考える。

六つの目（？）、沢山の先が尖った触手、そしてこのキモい見た目……。

「あ号標的？」

そうだ間違いない。アダルトゲーム『マブラヴオルタネイティブ』のラスボス的ポジションに鎮座しているキモい生物ＢＥＴＡ達の司令塔、重頭脳級こと『あ号標的』だ。

「改めてよく見ると……やっぱりキモい」

マブラヴオルタネイティブは友人に進められてやってみた事があるが、キャラクターや歴史設定をスルーして戦術機やＢＥＴＡとかに目が行っていた。

個人的には『不知火』などのスマートな機体よりも、『海神』のようなデップリとした機体が好きだ。性能うんぬんじゃなくて、見た目的にね。あと水陸両用機ってのがポイント高いかな。水陸両用機、なんて素敵な響きだ。惚れ惚れするぜ。

って

待て待て、そうじゃない。うっかりして自分の好みについて語ってしまったが、問題はそこではない。何故、あ号標的が僕の目の前にいるんだ？こいつはゲームの中の存在だろ？っつか、僕もこんなのが目の前にいるのに何でこんなにも冷静なのだろう？

《……命令》

「はい？」

と、思想に浸っていると、頭の中に声が響いてくる。もしかして、あ号標的がコンタクトを取ってきている？なんてこった、どうやら僕はＥＳＰ能力者として覚醒したようだ。そうで無いのなら、あ号（コ）標（イッ）的と会話できるはずがない。でも、《命令》？どういうことだ？

《命令。新型……開発、貴様》

命令、新型、開発、貴様。さて、どういうことだ？これだからＢＥＴＡの喋り方は疲れる。いちいち単語だから理解しずらい。

《命令。新型……開発、発想……提出、貴様》

ああもう、今解読してるんだから煩いよ。

命令、

新型……開発、

発想……提出、

貴様。

……も・し・か・し・て。

「僕に新型アイディアを出せと？」

《肯定する。貴様……認識》

嫌な予感があたった。こいつは僕に新しい個体を作るためのアイディアを出させようとしている。でもどうしようかな？こんなキモい生物を作る手伝いをしろなんて。

《命令、拒否の場合……》

そんな声が頭に響いたと思えば、

《抹消》

僕に突きつけられる、沢山の触手。

よし待て、落ち着け僕。そうだ、ｋｏｏｌじゃなくて、ｃｏｏｌになるんだ。ええと、確かコイツの触手は硬い戦術機の装甲も貫くほどの威力があったな。うん、積んだ。

「や、やだなぁ。拒否するわけないじゃないっすか。だからね？この触手は引っ込めて下さいな」

冷や汗を流しながら両手の人差し指で触手の一つを押しのける。

《認証。明日……活動開始》

さて、意味も分からずにあ号標的の相談役として（無理矢理）就職（させられ）してしまった。明日から仕事みたいだけど、はぁ。大丈夫かな？

＝続く＝

仕事くらい、自分で選びたいよね（後書き）

読者の方々からのアイディアも募集します。アイディアを出してもいいという方は感想のほうにお書きになって下さい。

ご協力、お願いします。

初仕事って、中々慣れないよね

さて、僕がよく分からない内に、ただの学生からＢＥＴＡのアイディアマンとしてジョブチェンジしてから一日がたった。今日から仕事だ、頑張るぞ！

「とは言ったものの……」

現状を報告すると、アイディアがまったく出ない！つか、僕はＢＥＴＡに関する表面的な知識（種類など）は大体知っているが、内部構造までは把握していない。まずはそこの所から教えてもらわなくては。

「と言う訳で、お願いします」

《許可》

わお、即答。効率性を重視しているのかな？まあ、それはいいとして……、

「あの、この触手はいったいなんでしょう？」

僕の目の前には、天井から垂れてきた一本の触手がある。先端にはトイレが詰まったときに使う吸盤のような物があり、その中で青色の電気がスタンガンのようにバチバチいっている。

……何だろう？凄く嫌な予感がする。

《情報……挿入》

その声が頭に響いたと思ったら、次の瞬間にはその触手の吸盤は僕の頭にペタリとくっつく。

「にぎゃあああああああああぁぁぁぁぁ！！！！！」

僕の身体を駆け巡る電気。そして流れてくる情報、情報、情報、情報……。

～しばらくして～

「ぐはっ……」

十分間の拷問から開放された僕はベタリと地面に倒れこむ。自らの体から、ブスッブスッという音が聞こえてくるのが分かる。

「ク…ッソ……。殺…す気……か」

《否定》

うっさい分かっとるわい。でも今の電撃と共に流れてきた情報のおかげで色々と分かった。

まずはＢＥＴＡの出生について。やつ等を生み出した創造主と呼ばれる珪素生命体は、一応生命体のいる惑星では開拓を行わないように命令しているらしいが、そいつは珪素生命体以外の生物を生物ではなく物質とみなしているため、地球で開拓が行われてしまっているらしい。頭が良いのだか、悪いのだかいまいちよく分からない。

ちなみに、人類を攻撃している理由は開拓の邪魔をしているからであるらしい。ここら辺は人間と変わらないと思う。人間だって、開拓に邪魔な木や岩はどかす。つまり、ＢＥＴＡ達にとって人間とは木や石と変わらないのだ。

原作にあった人体実験もそういった理由から行われている。人間だって、鉄鉱石を製鉄するのに心を痛める人はいないだろう。

あ、忘れていたけど、僕についても分かった。どうもあ号標的は人間が知能を持ってると、いい加減気付いたらしいが、それでも生命体とは認めていない。だからして、毒をもって毒を制することにした。人間の脳をＢＥＴＡの体に移植して、新たなＢＥＴＡを生み出すことにしたようだ。

そして生まれたのが僕。差し詰め人型級（ヒューマノイド）といったところだろうか。

兵士級（ソルジャー）の親戚のようなものか。アレも捕虜、もしくは捕食した人間を再利用して生まれているらしいし。

「ん？まてよ。今のところ僕は二足歩行していて、肌も（病的なまでに白くなっているが）人間の物って感じだけど、まさか顔が兵士級みたいになっていたりしないよね？」

この瞬間ほど鏡が欲しくなったことは無い。僕はあ号標的にアイディアを出すために外に出たいと申し出た。もちろんこれは建前で、本音は鏡を探しに行くのだ。後、服も。この場所にきてスッポンポンだとさっき気がついた。

あ号標的は《許可》と言ってあっさり許してくれた。アイディアさえ出してくれるのなら、別に何をしようが構わないとのこと。随分と扱いが雑だな。え？ストックの脳みそがあるからだって？ストックあるんだ。

それはそうと、さて出かけるかな。

◇

現在僕は、オリジナルハイヴの近くにある（と言っても十二、三キロは離れているのだが）廃墟に来ている。ここで服を探そうと思う。さっき風に乗って飛んできた布切れをマントのように被っているため、とりあえずスッポンポンではなくなったが、やはり真ともな服が欲しい。僕は露出狂ではないのだ。

ちなみに、護衛兼移動手段として戦車級（タンク）と光線級（レーザー）を一体ずつ貸してもらった。

しかし、幾ら護衛といえど、やはりキモい。そして戦車級の背中に乗るのはかなり嫌だ。そうだ、今度僕の移動手段としてのＢＥＴＡを作ってもらおう。うん、そうしよう。

それは兎も角、廃墟を探索していると大きな建造物を発見した。屋上の看板には『烏龍商？』と書いてあった。僕は中国語を読むことは出来ないのだが、文字から察するにウーロン茶を売っている所かな？それにしてはでかいな。まあ、探索してみるか。

～しばらくして～

この『烏龍商？』という建物は、どうやら大型ショッピングモールだったようだ。中に服屋や飲食店などの店の跡地が沢山あった。そしてここで服を拾った。もちろん下着も。

下はジーパンで、上は某学園都市最強が入院後から着ている白い長袖の服を着てみた。この世界（こっち）にもあるんだ、この服。

あ、そうそう。服屋で服を見繕った時に鏡で自分の顔を確認してみた。合わせると睨んでいるんじゃないかとよく勘違いされる一重の細目、少し若干痩せている丸顔。うん、顔は元の世界と同じだ。そう、顔は。

問題は髪の毛と瞳にある。元の世界では一般的な日本人らしいだったが、今では爺さんのような白髪ばかりで、黒髪の『く』の字すらない。次に瞳、元の世界では焦げ茶色の普通な色の瞳だったが、

今では血のような深紅になっている。

「……ふぅ」

僕は溜息をした後、大きく深呼吸をして、

「これじゃまんま某学園都市最強じゃないかーーーーー！！！！！！」

叫んだ。血管がぶち切れるのではないかと思うくらい叫んだ。

何で？何で突然アルビノになるの？可笑しいでしょ。あれか？ＢＥＴＡには紫外線は意味を成さないから自動的に色素が無くなる的な感じなのか？

しかし、某学園都市最強が好きだとはいえ、服の選択をミスった。でも今更着替えるのは面倒だし、もうこれでいいかな。

その後、僕はショッピングモールで着替えの服と下着を持ってハイヴに帰還した。

◇

「つーわけで、新しいヤツ考えたよ」

僕はあ号標的の前で言う。

《発想……貴様、求む。我》

オーケーオーケー、慌てるな。今情報を念話で転送するから。

僕が考えた新ＢＥＴＡは二種類。それは次のようなものだ。

新ＢＥＴＡその１

名称
猟犬（ハウンド）級

見た目
頭は長い後頭部に、犬のような口。背中からは後ろむきにパイプのような呼吸器官が生えている。長い尻尾があり、その先端には要撃（グラップラー）級の前脚と同じ材質の槍がある。機動性のみを重視したため筋肉が極端に薄く、骨格が強調されている。
ぶっちゃ毛、某宇宙の狩人と死闘を繰り広げた宇宙生物と殆ど同じである。

全長
３〜４．２メートル

全幅
０．３メートル

全高

０．６メートル

詳細

機動性を重視した固体。機動力はあらゆるＢＥＴＡの中でトップクラスであり、最大速度（トップスピード）は１１０ｋｍ／ｈ。さらに尻尾の槍は硬い戦術機装甲すら紙のように貫くことが出来る。

ただし、最高速度時にはほぼ直線的にしか進めず、機動性を重視した代償とでも言うべきか、防御能力は紙。３８口径の銃弾を受けただけでたじろぐ。

新ＢＥＴＡその２

名称

木馬（トロイ）級（または、軽突撃（デストロイヤー）級）

見た目

馬と突撃級が合わさって出来たようなもの。馬の頭にあたる部分には突撃級（デストロイヤー）のような装甲がある。一言であらわすのなら、小さい突撃級。

全長

１．５メートル

全幅

２メートル（腰の部分だけなら０．４メートル程）

全高

１．６〜１．７メートル

詳細

僕が乗る為のＢＥＴＡである。最高速度は８０ｋｍ／ｈ。
攻撃能力は殆ど無く、僕を乗せて移動するためだけに生まれた個体。
騎乗者が振り落とされないためにあまり速度は出せないが、急な方向転換が可能であり、防御性能もそこそこある。
首の付け根に、手綱のような触手が生えている。

終

猟犬級は敵の強襲に使えると思うし、木馬級は僕が外に出たときの移動手段として使いたい。はたして、この案は採用されるのだろうか。さあ、どうだ？

《発想、採用》

よっし！

《明後日、エリアωπ？＊ξα……侵攻。貴様……発想、出撃》

明後日までに製造してくれるらしい。これで失敗すれば、僕は役立たずの烙印を押されて廃棄処分されるだろう。それだけは絶対に避けなくてはならない。

それはそうとして、エリアωπ?*ξαってのは、いったいどの辺なんだろう?僕は頭の中の情報とキーワードを照らし合わせてみる。

エリアωπ?*ξα＝アラビア半島

アラビア半島かぁ〜。お土産に香辛料でも買ってこようかな。

あ。ぶっ壊すから買えないじゃんｏｒｚ。

まあ、ともかく、頑張らなきゃね。

＝続く＝

成果を発揮する時って、ドキドキするよね（前書き）

成果を発揮する時って、ドキドキするよね

さて、今日はアラビア半島の侵略活動決行の日だ。この戦場で始めて、『ぼくがかんがえたさいきょうのべえた（笑）』が使われる。

と、いっても、実際に戦闘要員としては猟犬（ハウンド）級だけなんだけどね。

「おわぁ～。アレが戦術機かぁ～」

前線では波のように押し寄せるＢＥＴＡの軍勢を、数が圧倒的に少ない戦術機で応戦している。僕は昨日出来上がった木馬（トロイ）級の上に乗り、前線からかなり離れたところで高みの見物をする。

遠目だけど、始めて見たな戦術機。そりゃそうだ、元の世界に戦術機なんてあったらとんでもないし。

と、ここでふと気になったことがあった。

「それにしても、何故この世界の人類は主力兵器を人型にしたのだろう？」

機動力を考えるのなら、戦車を改造したほうが早いと思うし、汎用性を考えるのなら腕やら足は邪魔だし。それ以前に、何で地面が陥没しないんだ？

って言うか、『二乗三乗の法則』何処にいった？どんな技術チート使ったらあんな細い足であの上半身を支えられるんだよ！？幾ら僕がいた世界より技術が進んでいるからって、進みすぎだろ！！？僕の世界じゃ物理法則や汎用性、その他うんぬんのせいで実用化されないんだぞ！！！？人型兵器が許されるのはフィクションの世界だけなんだよぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！

「おっと、取り乱してしまった」

よくよく考えたら、この世界もフィクションの世界なんじゃなかったっけ？つい現実とフィクション（フィクション）をごっちゃにしてしまった。あれ？でも今はこの世界がぼくの現実なわけだし、でも、あれ？あれれぇ～？？？？？

「止めよう。考えるだけ不毛だ」

僕は「はぁ」とため息を吐き、この無駄な考察を打ち切ることにした。

それはそうとして、新顔の猟犬ちゃん達はちゃんと頑張ってるかな？いや、頑張ってもらわないと困る。僕が廃棄処分されるかどうかが賭かっているのだから。

ああ、前線が気になる。

◆

『アルファー１よりＨＱ！至急援護射撃を要請！！早くしてくれッ！もう前線が保たない！！』

銃声と鮮血が飛び交う戦場。そこで人類とＢＥＴＡは戦っていた。

『くそッ！応援はまだ来んのか！！』

『ダメです！北側の前線が突破されて…敵の釘付けにされています！！』

人類は、鋼鉄の巨人《戦術機》に身を宿し、絶対的な絶望へと立ち向かう。

しかし、幾ら奴らを殺しても、ＢＥＴＡ達は湯水のように湧き出てくる。十殺せば百、百殺せば千と、圧倒的な物量で迫り来る。

『くそオッ！これ以上行かすかよッ！』

戦術機の一つが、波のように押し寄せるＢＥＴＡ達に向けて機関銃を乱射する。

『ダメだッ！後退だ！後退しろ０４！』

〈――――！〉

その時、警報が鳴り響き、レーダーが新たな影を捉える。

『た…隊長！二時方向に振動検知…旅団規模のＢＥＴＡ群です！！』

『何だと！？奴らまだ増えるというのか！？』

隊長格の戦術機は、迫り来る奴らを睨みつける。このままでは前線は突破され、このアラビア半島は奴らの手に渡ってしまう。ここで引く訳にはいかない。何としてでもこの前線を死守しなければならない。

隊長格の戦術機は今一度、機関銃を構える。

が、その時。

『な、なんだあれ――――ギャァッ！！！』

『０５どうした！？０５！！』

通信に響く、衛士の断末魔。モニターに映る、膝から崩れ落ちるように倒れる一機の戦術機。そして、巨人の屍の陰より姿を現す、新たな絶望。

『なっ……！』

長い後頭部に、犬のような口。背中からは後ろむきに生えるパイプのようなもの。骨格が強調され、胸の骨が浮き出ているミイラのような身体。槍のように鋭く、鞭のように靭（しなやか）に動く長い尻尾。

今までに見たことが無い、データにも無い。全く新しいＢＥＴＡ。

『し、新種…だと……！？』

突然の新種の出現に、人類はただ呆然と立ち尽くしているだけであったが、ソレ等は動いた。

『グギャッ！？』

一瞬。そう、一瞬。一瞬で新種のＢＥＴＡは戦術機に飛び込み、コックピットがある場所に向けて正確に槍を突き刺した。刹那の間も空けぬ速度、まさに神速であった。

『０４ォォォォ！！クソォォッ！！』

隊長機のパイロットは、冷静な判断力を失いただ我武者羅に機関銃を新種に向けて乱射する。

しかし、新種はその場から跳躍すると、翻弄するような動きで素早く跳びまわる。

『うぉぉぉぉぉぉぉぉお！！畜生！出ていけッ！！俺たちの星から――――！！』

銃を乱射するが、当たらない。新種はまるで遊んでいるかのように素早く動き回り、戦術機はそれを追いかけながら狙う。

だからこそ、気が付かなかった。すぐ後ろで鞭を振り上げている、要塞級(フォート)の存在に。

『出……！』

次の瞬間、飛び散る機械の破片。それに混じる、赤く暖かい液体。

後に残ったものは、少々のＢＥＴＡの死骸と、全滅した戦術機の残骸だけであった。

◇

「ん？」

前線が進み始めた。もしかして終わった？僕は前線付近にいる重光線級（レーザー）の視界とコンタクトしてみる。昨日使えるって分かった能力（チカラ）だ。

「あ、何だ終わってんじゃん。随分と呆気無いな」

正直、もう少して手古摺るかと思ったんだけど、そうでもなかったようだ。人間って結構貧弱なのな。

……あれ？

「思考パターンがＢＥＴＡ寄りしてきている？」

やだなあ、ＢＥＴＡみたいな理性もへったくれも無いようなのと一緒になりたくないよ。精神的にも気をつけよう、うん。

《サンプルΛ（ラムダ）。応答……》

っと、我等があ号標的さまからの通信だ。っつか、サンプルΛって僕の名前？

《命令。帰還……貴様》

ああ、はい帰って来いとのことですね。了解しました。

僕は木馬級の手綱（に見立てた触手）を引き、後ろに方向転換させてわき腹を蹴る。木馬級は鼻（らしき穴）から〈ふんっ〉と煙を噴出すと走り出す。

さて、帰った瞬間に廃棄処分されないといいんだけどな。

＝続く＝

結果発表の時も、ドキドキするよね（前書き）

今回はとても短いです。それと、１９９６年編はこれで終了です。

結果発表の時も、ドキドキするよね

あ号標的に命じられ、僕はオリジナルハイヴに帰還した。そして、ここはオリジナルハイヴ最下層の大広間（メインホール）。目の前には我等があ号標的さま。

《評価……》

「ゴクリ……」

これで低い評価なら、僕は廃棄処分されてしまうだろう。そんなの嫌だ。僕はもっと生きていたい。っつか、僕が死んだらこの小説終わりじゃね？

《……》

「……」

僕とあ号さま（もうこれでいいや）の間に立ちこむ、不穏な空気。ベットリと肌に張り付く、湿っぽい空気だ（↑気のせい。ハイヴ内は結構、涼しくて湿度も調度いい）。

《……》

「……」

《……》

「……」

《……》

「……（汗）」

《……》

「……う（汗）」

ピクッ

今、あ号さまが動いた！さあ、早く評価を！

《……》

「早くしろよ！！」

どんだけ溜めてるんだよ！溜めすぎだよ！あれか！？焦らして遊

んでいるのか！？ＢＥＴＡに感情って無いんじゃなかったっけ！！？

《謝罪。蓄積……暫定基準値、オーバー。我》

「いや、謝罪はいいから早くして！！」

《かっこ。笑。かっこ閉じ》

「かっことかっこ閉じを口で言うなぁぁぁぁ！！」

むがぁーッ、と僕は頭を抱える。何でＢＥＴＡにこんなユーモアがあるんだ？可笑しいだろ！？

《評価……》

「この野郎、何事も無かったかのように進めやがって……！」

何時かボコボコにしてやる。

《『○α×▽』『！⇒β◆』『？∴¥γ』『δ／（＾○＾）／』『焼却ε』・・・・・・五段階評価》

「いやゴメン、全く分かんない。ってか、一個変なの入ってなかった？それに最後のヤツ、思いっきり焼却って言ったよね？」

果てしなく不安だ。とりあえず、最初に言った順から高評価ってことでいいのでろうか？

《発表》

また無駄に溜めるんじゃ《○α×▽》ない・・・って、即答かよ！今度は早いなオイ！

っつか、『○α×▽』ってことは・・・・・・・・。

《今後・・・・・・期待。貴様》

YATAAAAAAAAAAAAA！！（↑某ヒーローの日本人風に）

死亡フラグ回避成功！そして生存√確保！これで勝つるッ！！

《発想・・・・・・発生時。我、報告》

っとぅ、あ号さまが何か言ってるぞ。何々？《アイディアを思いついたら自分に知らせろ》かな？オーケーオーケー、ノープログラムデェ～ス。ワタシニマッカセナサァ～イ。

あ、でも今日はもう疲れたから、また今度ね。

僕はあの廃墟にあったショッピングモールから持ってきた寝袋に潜り込み、深い眠りについた。次はどんなの考えようかな～。

＝続く＝

仕事に慣れても、人肌が恋しくなる時もあるよね（前書き）

今回は文章がお粗末かもしれません。

仕事に慣れても、人肌が恋しくなる時もあるよね

１９９Ｘ年、世界はＢＥＴＡの脅威に晒されていた！！それにより、あらゆる生命体が死滅したかに思われた。

しかし！

ガション↑戦術機が足踏みする音

キュピーン↑戦術機の目が光る音

人類は死滅していなかった！

◆

「おあたたたた！！おあたぁ！！」

『ふはははは！この戦術機の装甲が、貴様のような軟弱ＢＥＴＡに破れるものか！』

クルッ

『あ？怖気づいたか？』

『お前はもう、死んでいる』

『何をばかな――――ッヒ！』

《ボディー損傷拡大》↑コンピューターの電子ボイス

《右アーム損傷拡大》↑コンピューターの（ｒｙ

《左アーム損傷拡大》↑コンピ（ｒｙ

『ひでぶっ！？』

どかあああああぁぁぁぁぁぁん！！

◆

『俺の名前を言ってみろぉ！』

バコッ

『ぐわ！？』

「これは僕のぶん！」

バキッ

『ぐへ！？』

「これも僕のぶん！！そして・・・・・・・」

『あわわわ・・・・・・！』

「これは・・・これは・・・・・・・・・！」

「僕のぶんだあああああ！！！」

ずごおおおおおん！！

『ばわ！！』

◆

『俺は天才衛士だ！』

「その腕で秘孔（笑）を突けるかな？」

『なにぃ？』

ボムッ！

『ひええ！出力が落ちていくううううう！』

「おあたたたたたた！！」

『天才のこの俺が何故え～！！』

『うわらばっ！！』

◆

「白銀！我等が宿命に決着をつけようぞ！」

『望むところ！』

「『うおおおおおお！！！』」

『『『『『武　（ちゃん）（さん）！』』』』』』

「天に滅せい！白銀！！」

ラムダの勇気が、（ＢＥＴＡ）の未来を救うと信じて！

ご愛読、ありがとう御座いました。『工作員その１』の次回作にご期待下さい。（・ω・）ノシ

◇

「んな訳あるかあああ！！」

ガバッ、とベッドから起き上がりながら叫ぶ。全身汗びっしょりだ。ふっ、嫌な夢を見たもんだぜ（キリッ）。

あ～、皆様大変お待たせいたしました。ここからは夢の話（アホ作者が思いつきで書いたパロディ）ではなく本編です。

「ん～ッ・・・・・・そぉ！変な夢見た。最悪の目覚めだ」

僕は伸びをしてベッドから出ると、パジャマから何時ものジーパンに白黒のシャツという服装に着替える。そして歯で出来たドアを開けて外にでると、目の前にある白い橋がある。数ヶ月前までは無かった物だ。

あのアラビア半島侵略戦に勝利し、アラビア半島を支柱に収めた戦いから数ヶ月が経った。それに伴い、このハイヴの中も随分と変わった。

下を見れば、けばけばしい色の繭のような物が幾つもある。あれも数ヶ月前は無かった物だ。そしてその間を、量産された猟犬（ハウンド）級の一団が縫うように走り回る。

と、その繭の一つに切れ目が入ったと思うと、そこから単眼の巨大な芋虫が這い出て来た。あれは猟犬級、木馬（トロイ）級に続いて僕が考えた幾つかのＢＥＴＡの内の一つだ。

新ＢＥＴＡその３

名称
補強（サポーター）級

見た目
光線級のような単眼の瞳に、芋虫のような身体。全体的には深緑色だが、所々に痣のような紫色の模様がある。

全長
３．５〜５メートル

全幅
１．　４〜２．３メートル

全高
１．５〜２．４メートル

詳細
防御能力は紙以下のため、戦闘ではまったく活用できない。
体内で特殊タンパク質より出来た糸を生成する。主に成体になる時に自らを包む繭を作る時やハイヴの補強工事の時などに使うのだが、僕の指示で様々な所に色を飛ばしてくれる。
糸は発射して直ぐは粘着性を持つが、暫く外気に触れていると硬質

化してくる。
余談だが、コイツの身体は高級クッション顔負けという程にふわふわしていて気持ちが良いため、僕の昼寝の時はいつも一匹拝借し、寄りかかって寝ている。

終

この白い橋も、補強級の糸で作られている。僕が移動しやすいように作らせた。それに、ハイヴに侵攻された時も戦術機の足を止めてくれると思うし。まあどうでも良いか。

暫く歩き続けていると、よし着いた。ここは我等があ号標的の玉座だ。

「おはよう、コア。相変わらずキモい見た目だね」

《命令。貴様・・・・・・黙れ》

僕はあ号標的の事を学名で呼んでいる。そして軽口を叩けるほどの信用関係を築いた。これは大きな成果だと思う。廃棄処分の危険性は既に皆無と言っても過言ではないだろう。

《ゴホン・・・・・・。本題・・・・・・・突入》

「ほいほい。で？今度は何をすればいいの？」

とまあ、ふざけるのはここまでにして、そろそろ本題に入ろう。
最近ではアイディアを出すだけではなく、各地の鉱脈を調べたり、各地のハイヴの状況を直接見に行ったりもしている。毎日と言う程ではないが、一週間に三回のペースで働かされている。

《人類・・・・・・動き、不審。調査、貴様》

人類の動きが怪しいから、調べて来いと。了解。

「あ、この調査が終わったら一週間程休暇が欲しいんだけど、いいかな？」

《認証。許可》

流石、コア様々だな。キモい見た目の割に良い上司だ。

「ほんじゃ、行ってくるね」

《安全・・・・・・第一》

心配してくれているのかな？本当に感情が無いのか疑わしいな。

「人かぁ・・・・・・そういえば、人肌が恋しくなってきたな」

見た目はとりあえず人間だし、機会があれば接触してみようかな。

そんな事を考えながら、僕は木馬級に騎乗してハイヴから出る。

＝続く＝

仕事に慣れても、人肌が恋しくなる時もあるよね（後書き）

今回出てきた新しいおりＢＥＴＡは、戸谷様のアイディアを参考にさせていただいています。

これからも、応援よろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5502x/

BETA戦線異常無し

2011年10月23日21時16分発行